

『明遲流鞨鼓譜』解題、附翻刻

根本 千聰

1. 書誌情報

宮内庁書陵部蔵（伏見宮家旧蔵、函架番号・伏・一五三〇）。冊子本。縦二二二×横一五五ミリ。十五丁。仮綴。ところどころ虫損があるが書陵部において補修済。

外題には「明遲流鞨鼓譜」、内題には「鞨鼓譜 明遲流」とあり、書陵部では「鞨鼓譜（明遲流）」として登録されている。表紙外題下には「頼盛之」とあるが、これは奥書から書写者、あるいは元の所持者の名であることがわかる。また、表紙上部中央には朱で「子」（笛の指孔名か）とあるが、この意図は不明。

奥書によれば、貞和四年（一三四八）の六月から七月にかけて、「印春」から「頼盛宗禪房」へ伝授された楽譜であるという。この両名間の授受関係は、上野学園大学日本音楽史研究所蔵『新撰要記抄』奥書にも同様の経緯が記載されており、この時期、両名の密な親交のあったことをうかがわせる。また、どちらも同じ打物に関連する楽譜・楽書であり、本資料は明遲流、『新撰要記抄』は泊流であるという点も、打物の相承系譜を探るうえで重要な点である。

なお、書陵部における本資料に対する見解（資料整理カード）は、新型コロナウイルス感染対策のため閲覧の許可が下りなかつた。

2. 明遲と演奏伝承

本資料の奏法の祖となつたとされる「明遲」なる人物は、従来の音楽史研究においても知られている。すでに磯水絵氏による詳細な専論があるため、詳しくはそちらを参照していただくとして、ここでは簡単に確認しておくに留めたい。

『尊卑分脈』、『大家笛血脉』によれば、明遲は藤原式家明衡（？～一〇六六）の子とされる。『三会定一記』承徳元年（一〇九七）条には「明遲廿九」、保安元年（一一二〇）条には「講師明遲（六十二）」とあるから、逆算すると一〇五九年の生まれであり、明衡晩年の子であつたことになるが、父子の年齢差から考えて養子ではないかと見る向きもある。その後、経緯は不明ながら、興福寺に属する僧侶となつていることが諸資料からわかる。

父明衡は『新猿樂記』の著者であると比定されている。また、弟の敦光（一〇六三～一一四四）は、藤原宗輔撰『管絃譜』序文の草文を作成しているが、いずれも音楽に堪能であったことを直接に示すものではない。かるうじて、音楽芸能に対しても関心をもつた家系であつたとはいえようか。いずれにせよ、明遲が本格的に楽の道に目覚めたのは興福寺との縁をもつてからとみられ、師の円憲や、後述する玉手氏や泊氏といった南都の楽人たちとの交流に端を発したものではないかと推察される。

住居でもあつた「淨名院（淨明院）」は明遲の別称としても用いられるこ

とがある。同院は興福寺に存在していた子院である。明暹の音楽の師であつた円憲も同じく「淨名院」と称されることがあるが、一部に両者を取り違えた説話が伝わつてることを鑑みると、これは両者を混同した後人による勘違いの可能性もあるうか。なお、伏見宮家には『淨名院流琵琶説秘譜』（宮内序書陵部藏、函架番号・伏・一〇九〇）という琵琶譜が伝わるが、この楽譜と明暹・円憲がどのようにかかわり得るのかはわかつていらない。

『三五要録』などによれば、明暹は笛譜も編んでいたといふ。この笛譜に

ついては山井家藏の『新撰竜吟抄要録』高麗曲部分がその一部ではないかとみられているが、同譜は現在公開されておらず、わずかに平出久雄氏による調査記録が残るに留まる。いわく、「本撰譜者ガ—明暹。奥書ノ筆写ナルモ記名ナシ—当代天下無双ノ高麗笛師玉手友行七男兵庫允玉手公頼—公頼ノ伝承ニ関スル詳文アリー及子息公光・公延ニ從ツテ円憲ト共ニ笛曲ヲ習樂シ、然ル上公光・公延・円憲ト奥書ノ筆写（明暹）ニテ高麗笛譜ヲ共撰シ、更ニ猶則近ニ樂説ヲ問ヒテ、異論濫吹ノ現在ノ樂界ノ定譜ヲ作ル由ノ事情ヲ述ブ。」とあって、同譜は玉手公光、同公延、円憲らとともに、笛譜の正本として編まれたものであつたらしい。玉手氏は薬師寺を本拠とした樂人であつて、明暹の、南都樂人たちとの交流がうかがわれる。明暹とともに鞠鼓演奏伝承の重要人物として仰がれる柏行高も興福寺に属した南都樂人であるから、このあたりが打物伝承の発生圈となつていたのではないかと考えられる。

3. 書写者「頼盛」と「印春」について

書写者の宗禪房頼盛について伝える資料はごくわずかながら、判明することは意外に多い。『斑鳩嘉元記』（『大日本史料』所収）には次のように伝えられる。

一当時聖靈会三鼓事。延文二年六月日、新造之。作者頼盛宗禪房生五十、自住人、藥師寺黒筒造写。筒桐木者。慶祐大法師進之。料足ハ以慶玄法印御舍利供養之内、一臘実禪僧都沙汰之。抑藥師寺三鼓黒筒破損之間張替之。作者頼盛、延文元年四月廿六日ヨリ七箇日之間、精進結齋シテ其功畢生年五十五歲宗禪房先度張作者ハ、奈良ノ水門是正ト云寺侍張云々。百廿年ニテ張替之云々。以此次黒筒ノ寸法造様ヲ見写テ、少モ不替新造之。如法重宝也。

（句読点は筆者）

法隆寺聖靈会料三鼓也。藥師寺黒筒写。願主一臘内權少僧都実禪 権律師慶祐。作者筆篥吹寺僧 頼盛宗禪房年五十六 目安住。

（句読点は筆者）

頼盛は法隆寺の寺僧で筆篥吹であった。さらに、聖靈会に用いる鼓胴の作製まで任されるというのは多才な人物であったようだが、ともあれ、音樂、とりわけ打物については周囲からも信用が置かれていたことがうかがえる。これに先立つ『明暹流鞠鼓譜』の伝受と書写も、こうした人物的背景に起因したものであつたと推察されよう。

一方、伝授者の印春について伝える資料は管見に及ばない。ただし、前述したように、南都打物の伝承書である『新撰要記抄』についても、本資料と同様、印春と頼盛との授受関係が認められる。この『新撰要記抄』の奥書に

は「此書者印円^{深觀房}集秘書所被撰出也」とあって、深觀房印円によつて編まれたものであるといふから、印春はその弟子筋にあたる人物であろうか。印円の師である順良房聖宣は興福寺僧で、『教訓抄』を編んだ泊近真の後援者と目されている。⁽⁴⁾すると印春も興福寺楽人の関係者であつた蓋然性が高い。そうであれば、明暹にまつわる資料が伝えられていたことにも合点がゆこう。

4. 本書の資料的価値と鞨鼓演奏伝承の系譜について

明暹流の鞨鼓演奏伝承については、泊近真『教訓抄』をはじめとして、多くの打物関係樂書・樂譜に引載されている。とりわけ、泊行高流の奏法と併せて載せられていることが多く、平安末期以降、両流が鞨鼓奏法の礎となつていたらしいことがうかがわれる。本資料の原拠は不明ながら、明暹の演奏伝承を直接に伝えている可能性もあり、院政期における打物伝承を考察するうえで意義深い資料であるといえる。

明暹・行高の二つの流派のうち、泊行高の流れは近真ら南都泊氏に受け継がれたと考えられるが、では明暹流はといふと、奥書には、「仁和寺木工権守孝道、披見鞨鼓譜ヲ、散明暹流不審訖。所詮、明暹流鞨鼓者仁和寺孝道方習留之歟」とあつて、藤原孝道（一一六六～一二三七）がその流れを受け継いだと考えられていたらしい。しかし、明暹と孝道とでは活躍の時期が一世纪ほどずれており、当然、両者の生没年は重ならない。孝道がどの程度明暹流の奏法をふまえていたかは疑問である。ただし、孝道は先述した興福寺僧聖宣を甥にもつており、その関係から明暹流の鞨鼓奏法、あるいはその関連資料を知る機会は十分にあつたと思われる。ただ、聖宣との関係を考えるすれば泊近真も同様であるため、やはり、孝道が特別に明暹流を継いでいるとするのは根拠に乏しいだろう。

一方で、先の記載に統いて奥書に「管絃方殊以可賞翫流也」とある点は注

目に値する。すなわち、明暹から続く（と考えられている）孝道の系譜は「管絃方」、つまり堂上の奏法であるとみなされていたらしく、そうであれば、一方の行高流はさしづめ「地下方」の奏法とでもいえるようなものであつたと考えられよう。泊氏の打物伝承の流れはもとより、孝道の流れも、孝道撰『知國秘抄』や、孝道の嫡男孝時撰『法深本打物譜』、孝時の曾孫孝重撰『擊鼓抄』などから追うことができるため、このあたりの資料を精査することで、院政期から中世にかけての打物演奏伝承の変遷と、それがどのように現行伝承へと繋がり得るのかを解明することが可能なのではないかと期待される。

注
1 磯水絵 [一一〇〇三] 『院政期音楽説話の研究』（和泉書院）、[一一〇一六] 『説話と横笛』（勉誠出版）など。

2 平出久雄「一九五二」「山井景昭氏雅樂藏書目録（中）」（『東洋音樂研究』一〇、一一号）より。

3 e 国宝〈黒漆鼓胴〉解説文より (https://emuseum.nich.go.jp/detail?langId=ja&webVi ew=&content_base_id=100686&content_part_id=000&content_pict_id=0_11011四年一月二〇日確認済)。

4 神田邦彦「一二〇一七」『中世樂書の基礎的研究』（和泉書院）より。

5 本資料中に「仁和寺入道木工権頭藤原孝道去建保之比、依佐渡院之宣ニ、草進之本。但鞨鼓許被注之」とある点を奥書とともに鑑みると、本資料は藤原孝道によつて編まれたものである可能性も考えられる。後考を俟ちたい。

6 『法深本打物譜』（伏見宮旧蔵宮内庁書陵部蔵、函架番号：伏・一〇六八）。「擊鼓抄」（伏見宮旧蔵宮内庁書陵部蔵、函架番号：伏・一一〇二）。

凡例

- 丁の区切りはゴシック体の鉤括弧 () で示した。
- 割注での表記が難しい場合は、該当本文を [] で括って示した。その際、改行部分はスラッシュ (/) で示した。
- 朱筆部分は網掛けで示した。
- 読点 (「」) は、資料中では左側に寄せて記されている。
- 雁点 (レ点) は、資料中では中央に寄せて記されている。
- 楽譜部分は画像を貼付して示した。
- 判読が困難な字は [■] で示した。
- その他、特記事項は翻刻文下にゴシック体で表示した。
- なお、本資料はオンラインでも公開されている。適宜参照されたい。
(<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000703290000>)

(表紙)

明遲流
鞠鼓譜

賴盛之

明遲流

鞠鼓譜

賴盛之

(本文)

明遲流

鞠鼓譜

明遲流

先案譜法云

明遲流

鞠鼓譜

明遲流

○来 ●生 ○右号師來 ○左号師生 ●右名師生 准之可知之
 — 鞠鼓拍子也 引延引 火火急 丁停止



凡向鞠鼓之時先見両拔撰勁ツヨキヲ、為右、
 躍拔ツトル名來ト、不躍拔ツヨスセイト、●取拔之法
 下余メ一寸ヲ、擎スモル之ヲ、生拔強弱依機嫌ニ、來拔ノ
 躍ル程隨樂脉ニ、開ク拔ノ崎事五寸或六寸明遲流
 或八寸行高●打生ヲ、之時延頭指ヲ、明遲不延者行高
 打生之時去ルハ來拔ヲ、行高流雖モ打ト生拔ヲ、不ル
 去ヶ來ノ拔ヲ、明遲於左來、者不斷ニ令躍之ヲ、生ノ拔ハ
 聊勁ツヨク來ノ拔ハ久躍ル音色堅円マロニコ而有給キ
 韶キ、令ヨ不聞皮ノ音ヲ、以之ヲ、為吉ト、又欲々令ト急カセカシ
 樂ノ程ヲ、勁打之、欲令ト緩樂ナラノ程ヲ、弱打之、此等故
 実自余打物并絃管等皆准之可知之
 之大方於鞠鼓者雖トモ両ト其詞、以八声、為
 本所謂

●阿礼声アライ
 ●大葛声オオクラ
 ●小葛声コウカラ
 ●織锦声シテキムセイ

● 泉浪声 セムラウゼイ ● 鐙声 タウゼイ ● 砂声 サゼイ ● 塩声 エソゼイ 等也

「阿礼声」 「大葛声」 「小葛声」 「纏錦声」
「泉浪声」 「鐙声」 「砂声」 「塩声」 に声点。

且見于諸道之記抑以声々ノ字ノ仮名ナ
就当流明運注之行高流以声隆有之

始自打様、大旨相替歟阿礼声云々自余

背声云々准之歟但於当流者阿礼声

有子細歟限ル此声ニ又白水浪云々此者文字

之誤アヤマリ泉之一字ヲ二字ニ読成歟仍又声ノ

字無之、行高方之名目也此等ノ差異可

有存知、事也 已上相伝鞞鼓譜者

●仁和寺入道木工椎葉藤孝道法名智觀講善房去建保之比依

佐渡院之宣ニ草進之本、但鞞鼓許被注

之ニ先師禪門右馬助藤孝時法名智西法深房原●依今出川相国

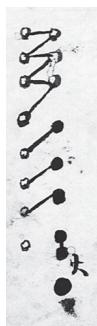
禪門公経命草進之打物譜等寄合之

撰出之事也

●音取

先笙次出調子次簫篥次笛音取終程七

可打之号阿礼声之最初師来之後下行來先立
左來明運



如此初ハ勁後ハ細ホソ末細ホソ打成テ打止ノ右生極テ

細少打重閑ニ答左來、可打止之、打終後乍

持右拔ヲ、以左手ヲ、張合鞞鼓於甲音ニ、●若甲音

難張合、者可張合乙音ニ、●但中院内大臣雅定
說云甲乙沙汰無其詮、只拔ト与皮ト、相應スル之程

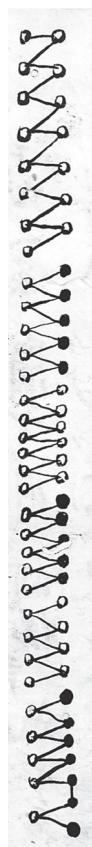
張合之條可宜歟云々大方張合鞞鼓事音

取之後可張、之由雖有之、●口伝云 笙調子

吹出之後笛調子以前無何ト、様ニテ張儲之後
打音取ヲ、上少スコシノ事ヲ任テ本式ニ、張合之躰無相

違、不如此、而打之時其音可聞惡故云々

●調子



吹出笛調子後自第三句、可打始阿礼短声已上調
子之間打生來生交搔上事兩三度許搔上

可宜歟●但於盤涉調々子者少シ長之間三度許搔

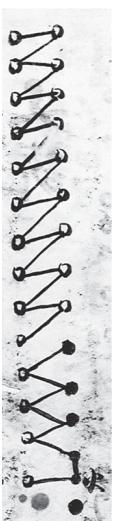
上之条可然乎是師口也云々●凡來生共無定數、

●但來ハ多久生ハ少短調子止時如音取生拔ヲ細ニ

二打重テ答來ヲ●閑ニ打止生拔ヲ、明運●行高ハ調子

不終程ハ不打生拔將欲終ト、之時打ト生拔、云々

●序
新樂第一句可打阿礼声之後



生拔打合太鼓之時以前二重打事如此但行高ハ

不然

如此打云々右口伝如此然而近來此等

口伝存分ル人ノ類ヒ希先歎能々此等差異存別フケ可

取向、哉

●同序 古樂壹鼓可打始事新樂同

—



隨大鼓擊近付湖船打蘇莫者等打之、

● 延八拍子 新樂 鞭鼓



延八拍子加々々、鞭鼓者不可打替之、



古樂 壹鼓
烏急錦物用之

● 同早八拍子



大鼓雖加々々、壹鼓者不可打替之



又說同上三度々々時用之為珍說、

● 同八拍子 只拍子 新樂



登臺居之 合樂詞、時々打之
頗秘之、世人云卷手之常不可打之

● 又說

凡八拍子物ハ生三四拍子物大鼓 以前生一也然而是大概也
万秋樂破散手破等初三当喜春樂破皇厂破等
初七当是生二反

● 同八拍子 古樂 壱鼓



大方只々々ノ時下来事為秘說、故初兩三々々打後不下来、
竹ノ節ニ可打之、云々
有打事

● 又說 秘之



常說 大鼓雖加々々、鞭鼓不可打替之但

大鼓加々々、之後鞭鼓ハ行抜ニテ

有打事

—

〔於此說者隨分秘說也
／ 輒タヤスク 不可用之〕



已上此打

已上壹鼓搔様如此古樂延八拍子時可用之、陵王破ハ
雖為早樂振舞同用此大鼓雖加々々、於壹者不可打替之、

● 早八拍子 新樂 鞭鼓



不難加大鼓々々、壹鼓

● 同八拍子 只拍子 古樂 壱鼓



加三度々々時用之常說也



●七拍子 有蘇合三帖



又說



已上阿說如次可打

●六拍子 春帝破
●万秋樂六帖等用之、



又說



倍盧 拔頭 輪鼓禪脫等用之

●同古樂 壹鼓

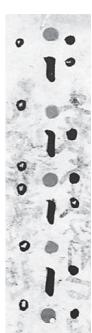


又說



已上阿說如次可打

●早四拍子 纽鼓不違延四拍子、



如此大鼓上一拍子之時
紐鼓用之

●五拍子 有皇帝三帖



又說



●延四拍子 甘州 蘇合破急 太平樂急等用之、



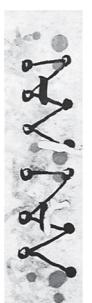
常說上
又說



〔号泉浪声、合樂詞、／嘲之時々可打之／殊為秘說云々〕

割注は前行末に三行。

●同揚拍子 大鼓羅者可打少葛声也



〔大鼓引拔二合天／下合師末、号少葛声〕

●同只拍子 甘州等



已上 新樂羯鼓

凡四拍子物初々々三當ル仍羯鼓者自第二々々、打始
生拔大鼓以前一也但是大概也甘州四二當ル三臺急五二
當歟

●蘇合序一帖

初二拍子 序吹成樂拍子之時羯鼓拍子五大鼓六當

之、



一說



一說也此後樂々々ノ



一說



一說也此後樂々々ノ

羯鼓打大葛声、々々々者如常八々々、打之、但拍子
不定或十二或十六十八廿四如此大鼓壺不定之

同師來三之後至大鼓壺、如此打之号大

葛声或說二十二所二十六所二十八所二八

八々々一六々々一廿四所二八八拍子三如此打合之、但不常、大葛

声者此新也仍用大葛声之條可宜凡末序吹之
時阿礼声可打之、

●同三帖第四第五 亂拍子間羯鼓號譜子又名詞打之、世人云

凡鞞鼓中古之上手者出雲已講明暹

南都淨名院住

左近將監狗行高也然行高方鞞鼓者泊氏等

是季翁信大禪師

此流則近真受彼真說教訓抄等彼正流也

於明暹流者行高譜中明暹已講被打樣適

云載之雖然為上代事之間真說雖弁之処

仁和寺木工權守孝道披見鞞鼓譜、散明暹流

不審訖所證明暹流鞞鼓者仁和寺孝道方習

留之、歟管絃方殊以可賞翫流也

貞和四年六月四日

於此鞞鼓者雖為隨分之秘譜頗盛
宗禪房多年無內外申承之上當時
數奇越時輩秀衆人之間奉授
此秘書訖能々可被秘藏者也穴
賢不可被外見之狀如件

貞和二年七月七日

印春

